

## 「田園都市国家」こそ 不況、外圧を乗り切る道

聞き手・俵 孝太郎

昭和四十六年秋、宏池会会長の政策構想として「日本の新世紀の開闢」を発表した直後のもの。一般には中国問題が注目されたが、目玉は田園都市国家構想だとして、その核心に迫るとともに市民運動の重視説を引き出している。

### 台湾について発言権はない

大平さんは先日箱根で開いた派内の議員研修会の席上、外交・内政全般にふれて見解を示された。時節柄これが次期総理候補の有力な一人である大平さんの立候補演説と、受け取られていますね。

大平（苦笑して）あそこで政策の基本にふれて発言するのは、池田（勇人）前総理、前尾（繁三郎・現法相）さんらのころからの、リーダーのいわば義務なんです。だから型どおりやっただめで、格別気負ってモノをいったわけじゃない。

しかし世間はそうはみない（笑い）。だいが慎重に構想を練られた、というウワサもありますよ（大平氏「イヤイヤ」と手をふる）。あの演説、新聞では、中国問題のくだりを大いに注目しましたね。

大平 あれはねエ、私の曰「ろ考えていること、かねて思っていること」を、すなおにいったままでねですがね。

大平さんは昭和三十八年、外相として、「もし中国が祝福されて国連に入ってくれば、日本も中国と国交を結ぶ」と答弁された。いまその時がきた、というわけですか。

大平（うなずいて）そうねえ。だから、私どもとしては、逆重要事項指定方式とか二重代表制とか世界の大勢に逆行する道をとるべきでない、という点を主張したまでです。まあ外交権は政府にあるんだから、政府はどくなさるかかわからん。しかしわれわれの立場はこうだぞ、ということですよ。

世界の大勢はさておき、大平さんご自身の中国観はどうですか。中国の日本軍国主義批判などを、保守党政治家の立場から、どうみますか。

大平（すらっと）これはねえ、相手が日本に気に入るように振る舞ってもらいたいといういわばゼイタクをいよいよつてもしかたない、ということですよ。外交というものは、政治体制の違い、考え方の差をこえて、やらねばならん。とくに中国は、いろいろ過去の歴史の経緯からいい分はありましよう。だから、中国とつきあうついで、いろいろむずかしい点はある。しかし、日本としては中国がなぜ日本を批判するのか、その理由をよく考えてみる。当たらないところまで賛成しなくていい。ただ、こちらはマナーを守り、外国を口汚なくはいわないようにありたいものだ。こういう態度でいくべきですよ。

むずかしいといえば、国府の問題、大平さんは例の『吉田書簡』当時の外相で、百もご承知でしょうが……。

大平（淡々と）これは、要するに国際信義をタテに国府との国交を守るか、国際情勢の変化のなかで中国との国交をとるか、その二者択一ですな。ならば、どちらが中国を真に代表する政権か、そこを考えるしかない。国府があるからといっておっでは現状を一步も出られない。逆に基本的なこ

るで踏み切れば、あとはその路線に沿ってやっていけるはずだ。

やっていけますか。国府切り捨て、台湾民族の自決権否定、こういった批判が、逆の側から出てきませんか。

大平 切り捨て、なんていうのは、ナマイキじゃないでしょうか。(きびしく)この問題は基本的に外国の内部の問題です。台湾民族の運命については、情緒的にはともかく、それを外交課題として、われわれがとやかくいうことはできない。なにぶんにも日本は、台湾をめぐることからについては、敗戦後、発言権を放棄してるんですから……。

### 日米間の甘えを捨てる時だ

話題をひろげて、日中国交回復後の理想的な日中関係のありかたは……。

大平 (ニベもなく)理想的な関係なんて、ありません。国際関係というのは、シンドイ、灰色の道ですよ。問題はつきつきとおこる。それを丹念にほぐしながら、互恵平等で、やっていくしかない。中国との関係だけじゃなく、どこの国とのつきあいまも、みなそうです。

日中もいいが、このさい日ソが先決ではないか、という議論もありますね。

大平 私は、国際関係をテンピンにかけ、軽重とが大小とかをいう、そんな考えはありません。

しかし、米中接近も、両者がソ連や日本をいらんでテンピンをかけた結果でしょう。

大平 (苦笑して)いずれにしても、私の趣味じゃないな。それに日本は、日中といわず日ソといわず、多面外交、多角外交をとらざるをえない立場ですよ。そしてこれからは、そのすべての局面で、

ノイローゼになるくらい考えつめる必要がおこってくる（深刻な表情）。

そのノイローゼ的局面に現に日米関係がある……。

大平（笑って）貿易が百億ドルを越える日米間に、これくらいの問題は、当然ありますよ。まあ、日本には、いままでアメリカに対する依頼心、甘えがあった。それと、東洋流というか、ハラとハラで通じ合えると単純に考えて、いうべきことをいわないクセも残っていた。

そうですね。

大平 アメリカには、保護者意識というか、敗戦国に対する姿勢があり、それが最近の日本の国力の伸びにつれて、驚嘆から嫉妬に、変わってきた。そこで、互いにいまままでの両国関係を改めて、対等のものにする努力が、必要になってきたんですね。

なるほど。

大平 これからは、日本も甘えを捨て、西欧流に、ものことはつきりさせる必要がある。しかし日米協調は、歴史の成果でもあるし、日本にとっては不動の前提ですよ。だから私は、日米関係については、長期楽観説だな。

しかし、昨今の景気と同様、長期楽観、短期悲観という面もあるでしょう。

大平（きつぱり）だから、その短期悲観を克服するのが双方の努力です。とりわけ日本は国際経済のアウトサイダーじゃない、インサイダーでなければ一日も立っていかぬ。という点からいっても、平価調整を含め、おとな同士の対等のつきあいに切り換えるための努力が求められるでしょうな。

日米の経済的な対立が、日米安保体制に力ゲを落とす心配はありませんか。

大平 安保の問題も、アメリカの意向もさることながら要は日本の選択ですからね。国際情勢の激

動のなかで、安保体制も変化してきている。米中打開によって安保のメリット、デメリットも変わっている。私は安保について、固定的、硬直的姿勢をとる必要は、ないと思う。変化してるんです。

野党は、大平さんとは別の意味で、安保は変質した、より危険を増したといってる。

大平（はつきり）それは、野党の考え方が古いなあ。対中国緊張の前提をはずし、米中打開の前提で、考え直すべきですよ。私はなにも、すぐさま安保再検討だ、とはいわない。しかし、硬直した堅持論、反対論、両者にとらわれず、国際情勢に即して日本が主体的に考えればいいことだ。

### 『田園都市国家構想』の核心

内政に移って、箱根で大平さんは『田園都市国家』論というものを出された。私、実は中国問題より、ここが大平さんの目玉商品じゃないか（笑い）と思ったんですが……。

大平 そうなんだよ（いきいきと）。これは高度福祉国家といっても、緑と太陽と水に恵まれた住みよい国といってもいいが、要はこの日本列島で、いまの過密、過疎の両極端じゃなくて、もっと分別のある住みかたはできんか、ということですよ。なんか厚みのある、バランスのとれた、住みよい社会はつくれぬか。その目標を『田園都市国家』といってみた。ほかにうまいキャッチ・フレーズがあれば、教えてください（笑い）。

二年前に経企庁が中心になってつくった、新全国総合開発計画、というものがありませんね。「情報化、高速化という新たな観点から、国土利用の抜本的な再編成をはかり」、「生活中心の価値観に対応する、よりよい社会環境をつくる」、「とらぬらひのものです。高速道路と、新幹線と、ジェット

空路と、データ通信で、空間的距離の長い日本列島を、時間的に短く結ぼう。そして「開発可能性を日本列島全域に拡大しよう」という。これと「田園都市国家」とは……。

大平 (うなずいて) 密接な関係があります。

ただ「新全総」は、人口の八割が都市に集中する。しかも東京・大阪圏に四千万人がやってくる、という前提で、どちらかというところ、都市と食糧基地の流通政策を考える、といったキライがありましたね。

大平 かならずしもそうではない。田園都市的な面も持っていたんです。しかし、集中に、いささか力点があった。だが「新全総」のネットワークはそのまま中央から地方への分散にも使えるんです。だからこの構想を生かして、人の流れ、産業の流れを、政策的に逆に向けていけばいい。これが「田園都市国家」づくりの、一つの基本にはなりません。

あの構想は、昭和六〇年完成ということでしたな。

大平 そう。だから私はこれをくりあげ着工して、五年に完成させてはどうか。そして着工したあとも、いまの計画を再検討し、欠けたものを補い、国土の様相と国民生活を一変させるようにしむけてはどうか。こう考えてるんです(熱心に)。

早期着工論は、当然いまの不況対策を兼ねますね。

大平 不況対策としても有効です。それに、「新全総」では三十坪クラスの住宅三千万戸の建設を見込んでいるから、人口分散とあいまって、全国の住環境を一変させることにもなる。もう一つ、内需中心に経済運営を切りかえ、輸出過剰がもたらす外圧を避ける効果もある。一石数鳥です(笑い)。

「新全総」の建設投資見込みは約三百兆円ですね。高度成長が望みうすの将来、こんな投資が

できますか。

大平 経済成長は、たしかに六〇年代のようなわけにはいかない。これは、なにより、技術革新がもう頂点に達した。こんごは外国の技術を導入して一挙に生産を伸ばすのはムリで、新技術の開発をまつしかない。こういう制約があるからです。だから、もう六〇年代の一〇パーセント台を越える成長を続けることはない。しかし日本民族のエネルギーをもってすれば、欧米よりははるかに高い、一ケタの上位の経済成長率は維持できる。六〇年代の建設投資は四十四兆円でしたが、経済の規模が格段に現に大きくなっているし、こんごも安定成長は続く。ならば（自信ありげに）実現可能です。

ただ、そうすると、国費はもっぱら社会資本充実にまわされる。社会福祉のような、見かたによつてはカネを食いつぶすものは、なおざりにされませんか。

大平 経済のモノサシが、俵さんの考えていられるより格段に大きくなる。だから、国民共通の財産をふやす社会資本への投資と、老人や病人や困窮者を助ける社会福祉とは、両立できます。まあ、幸いにして国民のみなさんのご賛同をいただけて、この目標を具体化できれば、われわれ貧乏国・日本に育つたものには夢のような、そして、すでに生活上の価値観の違っている若い世代にも、満足してもらえるような福祉社会が築けると思うね。

### 議員も市民運動を重視せよ

もう一つ大平さんは市民運動への政治の取り組み、ということをいわれたこのネライは……。

大平 いまままでの政治には、狎なれというか安易さというか、それがあつたと思つんです。保守党は、

よかれあしかれ政権担当能力のあるのは自分たちだけだ、と想って努力を怠った。ところが国民は、現実へのキビキビした適応を、政治に求めていた。政治意識も高まっていた。その国民の厳しさに、政治の甘さがついていけなかったから、いわゆる『脱政党』『脱選挙』が出てきている。

そのとおりですね。一九世紀生まれで、選挙区という地域チャンネルと、政党という階級チャンネルしか持たない議会政治が、都市に集中する新中間層の要求にこたえきれない、という制度的な問題もあった。

大平（うなずいて）そのとおりです。そこで議会政治というシステムでは汲み上げにくいものが、市民運動の形をとって、噴き出している。これに、われわれは、注目する必要があると思うんです。

社会党の江田三郎氏も、昨年出した社会党再建構想に、市民運動との取り組みをあげていましたね。

大平 江田さんのいうように組織面で市民運動を政党に組み込めるかどうか。これは、保守とか革新とかいうことではなくて、市民運動の成り立ちからみて、疑問がある。私たちは、むしろ市民運動を、要求の表現としてとらえる。それとともに、私たちも議員であると同時に市民ですから、市民運動に加わって汗を流し、ドロにまみれる。こつこつという態度が、必要だと思っんです。

自民党は、昭和四〇年代の国政選挙で、党派別得票率五割を割って、下向きを続けていますね。その危機感は……。

大平（まじめに）それは痛感しています。だからこそ、政治に取り組む姿勢そのものを、変えようとしている……。

政治の形そのものが、時代とともに変わっていますからね。大平さんは十年前、池田内閣の初



代官房長官として『低姿勢』を演出された。あのころは『経済の時代』といわれた……。

大平 そう。だがいまは『政治の時代』だといえますね。そういう呼びかた以上に、政治というものが、あのころとは比較にならぬほどむずかしくなった。

演出役から主役になつた大平さんは、もう『低姿勢』だけではやっていけない、と考えていられますか。

大平 そう考えています。あれではとても不十分だ。私も自身、もっと苦勞して見る必要がある。こう思っています。

ニュー・ニクソンならぬニュー・大平に期待しましょうか。では……。